

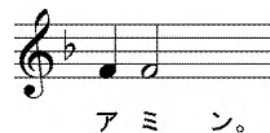
主 日 前 晩 課

第8調

注意 譜面中、五線譜上に $\parallel\circ\parallel$ とある部分は、その音程を保ちながら、その部分の歌詞（祈禱文）が持つ言葉の自然なリズムに則って歌うことを意味しています。ただ早く歌ってしまったり、棒読みになってしまったりしないよう、気をつけてください。この聖歌譜はそのために、歌詞の意味をとることが容易になるよう漢字を多く用いて作成しています。

2024年1月20日 釧路管轄司祭ステファン内田 作成
2024年8月23日 一部改訂

司祭) われら かみ つね あが ほ いま いつ よよ
我等の神は恒に崇め讃めらる、今も何時も世々に、



司祭) きた われら おう かみ こうはい
來れ、我等の王・神に叩拜せん、

きた われら おう かみ こうはいふふく
來れ、ハリストス・我等の王・神に叩拜俯伏せん、

きた われら おう かみ まえ こうはいふふく
來れ、ハリストス・我等の王と神の前に叩拜俯伏せん、

きた かれ こうはいふふく
來れ、彼に叩拜俯伏せん、

【 第103 聖詠 (首誦聖詠：我が靈よ主を讃め揚げよ) 】

わ が た ま し い よ お、 しゅ を ほ め え あ げ よ 。
我 靈 主 讃 揚

しゅ よ、 なんぢ い は あ が め ほ め え ら る。 しゅ 主
主 爾 崇 讚

わ が か み よ、 なんぢ は い た っ て お お い な り 。
我 神 爾 至 大

しゅ よ、 なんぢ い は あ が め ほ め え ら る。 な 爾
主 爾 崇 讚

ん ぢ は こ お え い と い げ ん と を こ お む う れ り 。
光 榮 威 嚴 被

しゅ よ、 なんぢ い は あ が め ほ め え ら る。 や ま 山
主 爾 崇 讚

の い た だ あ き に い み づ た つ う み い づ た 立
嶺 水 立

つ 。 しゅ うよ 、 なん ぢのしわざあは あ き い い な
主 爾 工 業 奇 異

り 。

やまの あいだ あに い み づ な が る う、 み い
山 間 水 流 水

づ なあが る 。 しゅ うよ 、 なん ぢのしわざあは あ き い
流 主 爾 工 業 奇

い な り 。

み な ち え を も っ て つ く れ り ち え
皆 智 慧 以 作 智 慧

を も っ て つ く れ り 。

こ お え い は な ん ぢ ば ん ぶ つ を つ く り し しゅ に い き
光 榮 爾 萬 物 作 主 歸

す 。

こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん に き す 、 い ま も
光 榮 父 子 聖 神 歸 今

い つ も よ よ に 、 ア ミ ン 。

何 時 世 世


 アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、かみ
神


 よこうえいはなんぢにきす。
光 榮 爾 歸


 アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、かみ
神


 よこうえいはなんぢにきす。
光 榮 爾 歸


 アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、かみ
神


 よこうえいはなんぢにきす。
光 榮 爾 歸

【 大聯禱 】

司祭) ^{われらあんわ しゅ いの}我等安和にして主に禱らん、


 しゅあわれ めよ。
主 憐

司祭) ^{うえ くだ あんわ われら たましい すくい ため しゅ いの}上より降る安和と我等が靈の救の爲に主に禱らん、


 しゅ あわれ めよ。
主 憐

司祭) ^{ぜんせかい あんわ かみ せい しよきようかい けんりつ およ しゅうじん ごういつ ため しゅ いの}全世界の安和、神の聖なる諸教會の堅立、及び衆人の合一の爲に主に禱らん、


 しゅ あわれ めよ。
主 憐

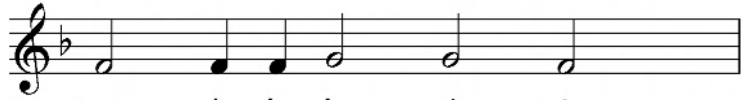
司祭) ^{こ せいどう およ しん つつしみ かみ おそ こころ もつ ここ きた もの ため しゅ いの}此の聖堂、及び信と慎と神を畏るる心とを以て此に来る者の爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。
主 憐

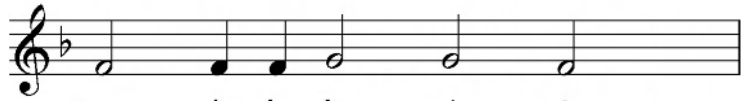
司祭) 教會を 司 る 尊貴なる我等の全日本の府主教 セラフィム、司祭の尊品、ハリス

トスに因る輔祭職、悉くの教衆、及び衆人の爲に主に禱らん、



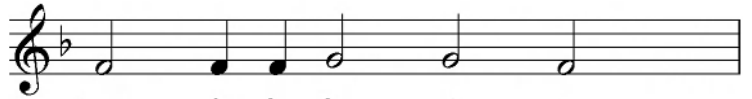
しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) 我國の天皇、及び國を 司 る者の爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) 此の都邑と凡の都邑と地方の爲、及び信を以て此の中に居る者の爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) 氣候順和、五穀豊穰、天下泰平の爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) 航海する者、旅行する者、病を患うる者、艱難に遭う者、擄となりし者、及び

彼等の救の爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) 我等諸の憂愁と忿怒と危難とを免るが爲に主に禱らん、



しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) 神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、

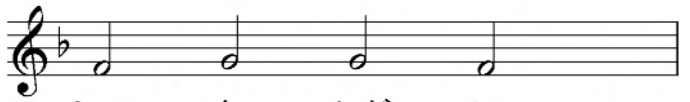


しゅ あわれ め よ 。
主 憐

司祭) ^{しせいしけつ} 至聖至潔にして ^{いた} 至りて ^{さんび} 讚美たる ^{われら} 我等の ^{こうえい} 光榮の ^{ぢよさい} 女宰、^{しょうしんぢよ} 生神女、^{えいていどうぢよ} 永貞童女マリヤと、

^{しよせいじん} 諸聖人を ^{きおく} 記憶して、^{われらおのれ} 我等己の ^{みおよ} 身及び ^{たがい} 互に ^{おのおの} 各の ^み 身を以て、^{もつ} 並に ^{ならび} 悉くの ^{ことごと} 我等の

^{いのち} 生命を以て、^{もつ} ハリストス ^{かみ} 神に ^{いたく} 委託せん、



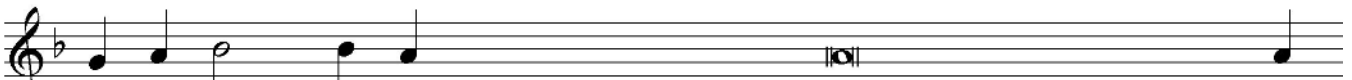
しゅ な んぢ に 。
主 爾

司祭) ^{けだし} 蓋、^{およ} 凡そ ^{こうえい} 光榮 ^{そんきふくはい} 尊貴 ^{なんぢちち} 伏拜は ^こ 爾父と ^{せいしん} 子と聖神に ^き 歸す、^{いま} 今も ^{いつ} 何時も ^{よよ} 世々に、

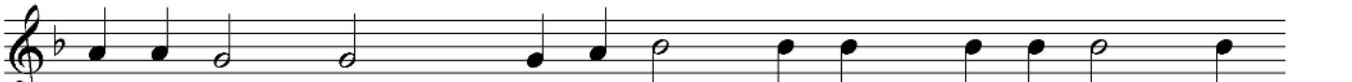


ア ミ ン。

【 第一カフィズマ 第一段 】



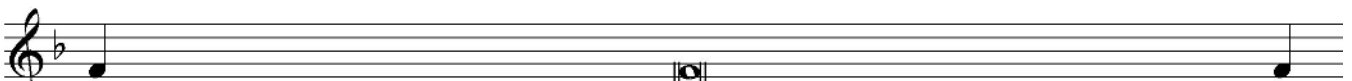
あくに んのはかりごと に ゆかざるひとはさい
悪 人 謀 行 人 福



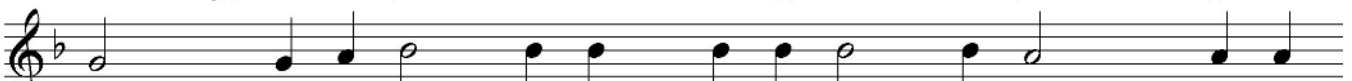
わいな り、ア リ ル イ ヤ、ア リ ル イ



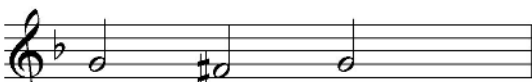
ヤ、ア リ ル イ ヤ。



しゅ は ぎ じ ん の み ち を し る、 あ く に ん の み ち は ほ ろ
主 義 人 途 知 悪 人 途 滅



び ん、ア リ ル イ ヤ、ア リ ル イ ヤ、ア リ



ル イ ヤ。



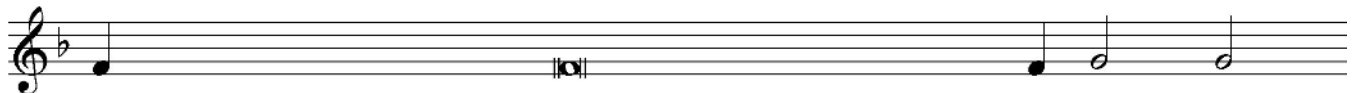
おそれしゆにつとめよ、おののきてそのまえ
畏 主 勤 戦 其 前



によろこべよ、ア ril ル イ ヤ、ア ril ル イ
喜



ヤ、ア ril ル イ ヤ。



およそかれをたのむものはさいわいなり、
凡 彼 侍 者 福



ア ril ル イ ヤ、ア ril ル イ ヤ、ア ril ル



イ ヤ。



しゆやたてよ、わがかみや、われをすくいた給
主 立 吾 神 我 救 給



まえ、ア ril ル イ ヤ、ア ril ル イ ヤ、



ア ril ル イ ヤ。



すくいしゆに よる なんぢの こうふくは なんぢの た
救 主 依 爾 降 福 爾 民



みにあり、ア ril ル イ ヤ、ア ril ル イ
在



ヤ、ア ril ル イ ヤ。

こう え い は ち ち と こ と せ い し ん に き す 、 い ま も
光 榮 父 子 聖 神 歸 今

い つ も よ よ に 、 ア ミ ン 。 ア リ ル イ ヤ 、 ア
何 時 世 世

リ ル イ ヤ 、 ア リ ル イ ヤ 。

【 小聯禱 】

司祭) われらまたまたあんわ ^{しゅ いの} 我等復又安和にして主に禱らん、

しゅ あ わ れ め よ 。

主 憐

司祭) かみ ^{なんぢ おんちやう もつ} 神よ、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、

しゅ あ わ れ め よ 。

主 憐

司祭) ^{しせいしけつ} 至聖至潔にして ^{いた} 至りて ^{さんび} 讚美たる ^{われら} 我等の ^{こうえい} 光榮の ^{ぢよさい} 女宰、 ^{しょうしんぢよ} 生神女、 ^{えいていどうぢよ} 永貞童女マリヤと、

^{しよせいじん きおく} 諸聖人を記憶して、 ^{われらおのれ} 我等己の身及び ^{みおよ} 互に ^{たがい} 各の身を以て、 ^{おのおの} 並に ^み 悉くの ^{もつ} 我等の

^{いのち} 生命を以て、 ^{かみ} ハリストス神に ^{いたく} 委託せん、

しゅ な ん ぢ に 。

主 爾

司祭) ^{けだしけんべいおよ} 蓋權柄及び ^{くに} 國と ^{けんのう} 權能と ^{こうえい} 光榮は ^{なんぢちち} 爾父と ^こ 子と ^{せいしん} 聖神に ^き 歸す、 ^{いま} 今も ^{いつ} 何時も ^{よよ} 世世に、

ア ミ ン 。

【 第140聖詠 (主よ爾に籲ぶ) 第8調 】

しゅよなんぢによぶすみやかにわれにいたりた給
主 爾 呼 速 我 格 給

まあえ、しゅよわれにききたまあえ。
主 我 聽 給

しゅよなんぢによぶすみやかにわれにいたりた給
主 爾 呼 速 我 格 給

まあえ、なんぢによぶときわがいのりの
主 爾 呼 時 我 禱

こえをいれたまあえ、しゅよわれにききた給
聲 納 給 主 我 聽 給

まあえ、ねがわくはわがいのり
主 願 我 禱

はこうろのかおりのごとおくなんぢが
香 爐 香 如 爾

かんばせのまえにのぼり、わがてを
顔 前 登 我 手

あぐるはくれのまつりのごとくいられん
擧 暮 祭 如 納

しゅよわれにききたまあえ。
主 我 聽 給

誦經) しゅ わくち まもり お わくちびる もん ふせ たま わ こころ よこしま ことば かたぶ
主よ、我が口に衛を置き、我が唇の門を扞ぎ給え、我が心に邪なる言に傾

きて、不法を行う人と共に、罪の推諉せしむる母れ、願わくは我は彼等の甘味を嘗め

ざらん。義人は我を罰すべし、是れ矜恤なり、我を譴むべし、是れ極と美しき膏、我

が首を悩ます能わざる者なり、唯我が禱は彼等の悪事に敵す。彼等の首長は巖石

あいだ さん わ ことば にゆうわ き われら つち ごと き くだ わ ほね ちごく ぐち
の間に散じ、我が言の柔和なるを聴く。我等を土の如く斫り砕き、我が骨は地獄の口

ち お しゅ しゅ ただわ め なんぢ あお われなんぢ たの わ たましい しりぞ
に散りて落つ。主よ、主よ、唯我が目は爾を仰ぎ、我爾を恃む、我が靈を退くる

なか わ ため もう わな ふほうしゃ あみ われ まも たま ふけんしゃ おのれ あみ かか
母れ。我が爲に設けられし弥、不法者の網より我を護り給え。不虔者は己の網に罹

ただわれ す え
り、唯我は過ぐるを得ん。

【 第141聖詠 】

わ こえ もつ しゅ よ わ こえ もつ しゅ いの わ いのり そのまえ そそ わ うれい
我が聲を以て主に呼び、我が聲を以て主に禱り、我が禱を其前に注ぎ、我が憂を

そのまえ あらわ わ たましい うち よわ とき なんぢ われ みち し わ ゆ みち おい
其前に顯せり。我が靈の衷に弱りし時、爾は我の途を知れり、我が行く路に於て、

かれら ひそか わ ため あみ もう われみぎ め そそ ひとり われ みと もの われ
彼等は竊に我が爲に網を設けたり。我右に目を注ぐに、一人も我を認むる者なし、我

のが ところ わ たましい かえりみ もの しゅ われなんぢ よ い なんぢ われ
に通る所なく、我が靈を顧る者なし。主よ、我爾に呼びて云えり、爾は我の

かくれが い もの ち おい われ ぶん わ よ き たま われはなはだよわ
避所なり、生ける者の地に於いて我の分なり。我が呼ぶを聴き給え、我甚弱りたれば

われ はくがい もの すく たま かれら われ つよ
なり、我を迫害する者より救い給え、彼等は我より強ければなり。

句⑩ わ たましい ひとや ひ いだ われ なんぢ な さんえい たま
我が靈を獄より引き出して、我に爾の名を讚榮せしめ給え。

讃詞⑩ われらくれ うた れいち つとめ なんぢ たてまつ なんぢふくかつ もつ われら すく
ハリストスよ、我等晩の歌と靈智の務とを爾に獻る、爾復活を以て我等を救

たま よ
い給いしに因る。

句⑨ なんぢおん われ たま とき ぎじん われ めぐ
爾恩を我に賜わん時、義人は我を環らん。

讃詞⑨ しゅ しゅ われら なんぢ かんばせ しりぞ なか ふくかつ もつ われら すく たま
主よ、主よ、我等を爾の顔より退くる母れ、復活を以て我等を救い給え。

句⑧ しゅ われふか ところ なんぢ よ しゅ わ こえ き たま
主よ、我深き處より爾に呼ぶ。主よ、我が聲を聴き給え、

讃詞⑧ せい しよきようかい はは かみ すまい よろこ なんぢ はじ ふくかつ よ つみ
聖なるシオン、諸教會の母、神の住所よ、慶べ、爾は始めて復活に由りて罪の

ゆるし う
赦を受けたればなり。

句⑦ ねが なんぢ みみ わ いのり こえ き い
願わくは爾の耳は我が禱の聲を聴き納れん。

讃詞⑦ よよ さき かみちち うま すえ とき こんいん あづか どうていちよ あまん み と
世世の前に神父より生れ、末の時に婚姻に與らざる童貞女より甘じて身を取り

ことば じゅうじか てい し しの おのれ ふくかつ もつ むかしころ ひと すく たま
し言は十字架に釘せられ、死を忍びて、己の復活を以て昔殺されし人を救い給

えり。

句⑥ ^{しゅ も なんぢふほう ただ しゅ だれ よ た しか なんぢ ゆるし ひと なんぢ} 主よ、若し爾不法を糺さば、主よ、孰か能く立たん。然れども爾に赦あり、人の爾
^{まえ つつし ため}の前に敬まん爲なり。

讃詞⑥ ^{われら なんぢ し ふくかつ さんえい なんぢ これ もつ やから ち} ハリストスよ、我等は爾の死よりの復活を讃榮す。爾は此を以てアダムの族を地
^{ごく くるしめ と かみ せかい えいえん いのち おおい あわれみ たま}獄の苛虐より釋き、神として世界に永遠の生命と大なる憐とを賜えり。

句⑤ ^{われしゅ のぞ わ たましいしゅ のぞ われかれ ことば たの} 我主を望み、我が靈主を望み、我彼の言を恃む。

讃詞⑤ ^{きゅうせいしゅ かみ どくせい こ じゅうじか てい みつかめ はか ふくかつ} ハリストス救世主、神の獨生の子、十字架に釘せられて、三日目に墓より復活せ
^{しゅ こうえい なんぢ き}し主よ、光榮は爾に歸す。

句④ ^{わ たましいしゅ ま ばんにん あさ ま ばんにん あさ ま はなはだ} 我が靈主を待つこと、番人の旦を待ち、番人の旦を待つより甚し。

讃詞④ ^{しゅ われら なんぢあまん わ ため じゅうじか しの もの さんえい ぜんのう きゅうせいしゅ} 主よ、我等は爾甘じて我が爲に十字架を忍びし者を讃榮す、全能の救世主よ、
^{なんぢ ふくはい ひと あい しゅ われら なんぢ かんばせ しりぞ なか すなわちわれら き}爾に伏拝す。人を愛する主よ、我等を爾の顔より退くる勿れ、乃我等に聽
^{なんぢ ふくかつ もつ われら すく たま}きて、爾の復活を以て我等を救い給え。

句③ ^{ねが しゅ たの けだしあわれみ しゅ おおい あがない かれ かれ} 願わくはイスライリは主を恃まん、蓋憐は主にあり、大なる贖も彼にあり、彼
^{そのことごと ふほう あがな}はイスライリを其悉くの不法より贖わん。

讃詞③ ^{かみ はは てん ひんい なんぢ さんえい けだしなんぢしじょう もの ちちおよ せいしん とも えい} 神の母よ、天の品位は爾を讃榮す、蓋爾至淨なる者は父及び聖神と偕に永
^{ざい かみ いし もつ む てんし ぐん つく しゅ う たま ただ なんぢ しょうしんぢよ}在する神、意志を以て無より天使の軍を造りし主を生み給えり。正しく爾を生神女
^{ほ うた もの たましい すく てら かれ いの たま}と讃め歌う者の靈を救いて照さんことを彼に祈り給え。

句② ^{ばんみん しゅ ほ あ ばんぞく かれ あが ほ} 萬民よ、主を讃め揚げよ、萬族よ、彼を崇め讃めよ、

讃詞② ^{ぢよさい われなんぢ せいせい いづみ せいしん かがや じゅんきん やくひつ なんぢ まえ} 女宰よ、我爾を成聖の泉、聖神に輝かざる純金の約匱として、爾の前
^{ふふく いの よく ふけ わ ふとう たましい てら われ あくき はなはだ くるしめ}に俯伏して祈る、愆に耽る我が不當なる靈を照し、我を惡鬼の甚しき苛虐しめ
^{のが われ つまづき すくい みち ゆ たま}より脱れしめて、我に蹉跌なく救の道を行かしめ給え。

句① ^{けだしかれ われら ほどこ あわれみ おおい しゅ しんじつ なが ぞん} 蓋彼が我等に施す憐は大なり、主の眞實は永く存す。

讃詞① ^{ほうざ た しょ ひら おこない あらわ かくじん おのれ おもに にな らたい まえ} 寶座は立てられ、書は披かれ、行は露れ、各人が己の重任を荷い、裸体にして前
^{た かみ いきどおりおよ そのぎ しんもん おのの とき ぢよさい そのときわれ あわれ つみ}に立ちて、神の憤及び其義なる審問に慄く時、女宰よ、其時我を憐みて、罪
^{われ およそ ていざい もろもろ くるしみ のが たま}なる我を凡の定罪と諸の苦より脱れしめ給え。

【 ドグマチカ (生神女讃詞) 第8調 】

こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん に き す 、 い ま も
 光 榮 父 子 聖 神 歸 今

い つ も よ お よ に 、 ア ミ ン。
 何 時 世 世

て ん の お う は ひ と を あ い す る に よ り て ち
 天 王 人 愛 因 地

に あ ら わ あ れ 、 ひ と と と も に い ま
 現 人 借 在

せ え り 、 け だ し き よ き ど う て い ぢ よ よ り
 蓋 淨 童 貞 女

み を と り 、 ひ と の せ い を た も ち て う ま れ し
 身 取 人 性 有 生

も の は 、 ふ た つ の せ い に て ひ と つ の く ら い
 者 二 性 一 位

あ る ど く い つ し な あ り 、 ゆ え に わ れ ら 等
 獨 一 子 故 我 等

か れ が じ つ に ま っ た き か み お よ び ま っ た き ひ と
 彼 實 全 神 及 全 人

な る を つ た え て ハ リ ス ト ス わ が か み を う 承
 傳 吾 神 承

け み と お む 、 お っ と を し ら ざ る は は あ
 認 お 夫 識 母 母 あ

よ、わがたましいのあわれみをこうむらんこ
我 靈 憐 蒙
とをかれにいのりたまあえ。
彼 祈 給

司祭) ^{えいち} 睿智、^{つつし} 肅 ^た みて立て、

【 聖ソフロニイの祝文 】

せいにしてふくたるじょうせいなるてんのちちの
聖 福 常 生 天 父
せいなるこうえいのおだやかなるひかりイイ
聖 光 榮 穩 光
ススハリストスよ、われらひのいりにいたりく
我 等 日 入 至 暮
れのひかりをみて、かみちちとことせいしん
光 見 神 父 子 聖 神
をうとおう。いのちをたもうかみのこ
歌 生 命 賜 神 子
よ、なんぢはいつもけいけんのこえにてうたわ
爾 何 時 敬 虔 聲 歌
るべし、ゆえにせかいはなんぢをあがめ
故 世 界 爾 崇
ほむ。

【 大プロキメン 第6調 】

司祭) ^{つつし} 謹 ^き みて ^{しゅうじん} 聴く ^{へいあん} べし、 ^{えいち} 衆 人に ^{えいち} 平安、 ^{えいち} 睿智、

誦經) ^{プロキメン} 提 綱、 ^{しゅ} 主は ^{おう} 王たり、 ^{かれ} 彼は ^{いげん} 威 嚴 ^き を衣たり、



しゅ は お う た り 、 か れ は い げ ん を き た
主 王 彼 威 嚴 衣

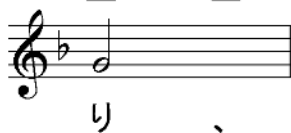


り 、

誦經) ^{しゅ} 主は ^{のうりよく} 能 力 ^き を衣、 ^{またこれ} 又 ^{おび} 之を帯にせり、



しゅ は お う た り 、 か れ は い げ ん を き た
主 王 彼 威 嚴 衣

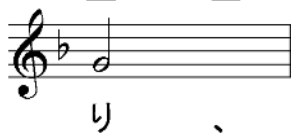


り 、

誦經) ^{ゆえ} 故に ^{せかい} 世界は ^{けんご} 堅 固 ^{うご} にして ^{うご} 動かざらん、



しゅ は お う た り 、 か れ は い げ ん を き た
主 王 彼 威 嚴 衣




り 、

誦經) ^{しゅ} 主よ、 ^{せいとく} 聖 徳 ^{なんぢ} は ^{いえ} 爾 の ^{ぞく} 家 ^{えいえん} に ^{いた} 屬 して ^{えいえん} 永 遠 ^{いた} に ^{いた} 至 らん、

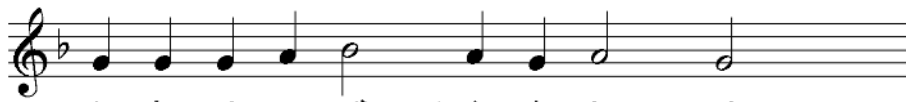


しゅ は お う た り 、 か れ は い げ ん を き た
主 王 彼 威 嚴 衣



り 、

誦經) ^{しゅ} 主は ^{おう} 王たり、



かれはいげんをきたり。
 彼 威 嚴 衣

【 重聯禱 】

司祭) ^{かみ なんぢ おおい あわれみ よ われら あわれ なんぢ いの き い あわれ}
 神よ、爾の大なる憐に因りて我等を憐めよ、爾に禱る、聆き納れて憐めよ、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。
 主 憐 主 憐 主 憐

司祭) ^{またわがくに てんのうおよ くに つかさど もの ため いの}
 又我國の天皇及び國を司る者の爲に禱る、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。
 主 憐 主 憐 主 憐

司祭) ^{またきょうかい つかさど そんき われら ぜんにほん ふしゅきょう およ お}
 又教會を司る尊貴なる我等の全日本の府主教セラフィム、及びハリストスに於
^{ことごと われら けいてい ため いの}
 ける悉くの我等の兄弟の爲に禱る、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。
 主 憐 主 憐 主 憐

司祭) ^{またつね きおく ふく こ せいどう こんりゅうしゃ およ すで ねむ ことごと ふそ}
 又恒に記憶せらるる福たる此の聖堂の建立者、及び既に寝りし悉くの父祖
^{けいてい こ ところ しょほう ほうむ せいきょう もの ため いの}
 兄弟、此の處と諸方とに葬られたる正教の者の爲に禱る、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。
 主 憐 主 憐 主 憐

司祭) ^{またかみ しょぼくこ せいどう けいてい じれん せいめい へいあん そうけん きゅうしょく けんこ かん}
 又神の諸僕此の聖堂の兄弟に、慈憐、生命、平安、壮健、救贖、眷顧、寛
^{ゆう およ しょざい ゆるし たま ため いの}
 宥、及び諸罪の赦を賜わんが爲に禱る、



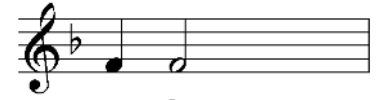
しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅあわれめよ。
 主 憐 主 憐 主 憐

司祭) ^{またこ せいどう もの たてまつ ぜんぎょう おこな これ ろう これ うた およ ここ た}
 又此の聖堂に物を獻り、善業を行い、之に勞し、之に歌い、及び此に立ちて
^{なんぢ おおい ゆたか あわれみ あお のぞ もの ため いの}
 爾の大にして豊なる憐を仰ぎ望む者の爲に禱る、



しゅあわれめ、しゅあわれめ、しゅ あわれ め よ 。
主 憐 主 憐 主 憐

司祭) ^{けだしなんぢ じれん ひと あい かも われらこうえい なんぢちち こ せいしん けん いま}
蓋 爾 は慈憐にして人を愛する神なり、我等光榮を爾 父と子と聖 神に獻ず、今
^{いつ よよ}
も何時も世に、



ア ミ ン。

誦經) ^{しゅ われら まも つみ こ くれ わた たま しゅわ せんそ かも なんぢ あが ほ}
主よ、我等を守り罪なくして此の晩を度らせ給え、主吾が先祖の神よ、爾 は崇め讃
^{なんぢ な よよ とうと うた}
められ 爾 の名は世に 尊 み歌わる、アミン。

^{しゅ なんぢ たの よ なんぢ あわれみ われら た たま しゅ なんぢ あが ほ}
主よ、爾 を待むに因りて、爾 の 憐 を我等に垂れ給え、主よ、爾 は崇め讃めらる、
^{なんぢ いましめ われ おし たま しゅさい なんぢ あが ほ なんぢ いましめ われ さと}
爾 の 誠 を我に訓え給え、主 宰よ、爾 は崇め讃めらる、爾 の 誠 を我に悟らせ
^{たま せい もの なんぢ あが ほ なんぢ いましめ われ てら たま}
給え、聖なる者よ、爾 は崇め讃めらる、爾 の 誠 にて我を照し給え。

^{しゅ なんぢ あわれみ よよ あ なんぢ て つく もの す なか ほまれ なんぢ き}
主よ、爾 の 憐 は世に在り、爾 の手の造りし物を棄つる勿れ、讃 は 爾 に歸し、
^{うた なんぢ き こうえい なんぢちち こ せいしん き いま いつ よよ}
歌は 爾 に歸し、光榮は 爾 父と子と聖 神に歸す、今も何時も世に、アミン。

【 増聯禱 】

司祭) ^{われらしゅ まえ わ くれ いのり ま くわ}
我等主の前に吾が晩の 禱 を増し加えん、



しゅあわれ めよ 。
主 憐

司祭) ^{かも なんぢ おんちよう もつ われら たす すく あわれ まも}
神よ、爾 の恩 寵 を以て、我等を助け救い 憐 み護れよ、



しゅ あわれ めよ 。
主 憐

司祭) ^{こ くれ じゅんぜん せいせい へいあん むざい しゅ もと}
此の晩の 純 全・成 聖・平 安・無 罪ならんことを主に求む、



しゅ た ま え よ 。
主 賜

司祭) ^{へいあん てんし ただ きょうどうし わ れいたい しゅごしや たま しゅ もと} 平安の天使、正しき 教 導 師、吾が靈 體の守護者を賜わんことを主に求む、



司祭) ^{われら つみ あやまち なだ ゆる しゅ もと} 我等の罪と 過 とを宥め赦さんことを主に求む、



司祭) ^{われら たましい ぜん えき こと およ せかい へいあん たま しゅ もと} 我等の 靈 に善にして益ある事、及び世界に平安を賜わんことを主に求む、



司祭) ^{われら いのち よじつ へいあん つうかい もつ おわ しゅ もと} 我等の生命の餘日を平安と痛悔とを以て終らんことを主に求む、



司祭) ^{われら いのち おわり かな やまい はぢ へいあん およ} 我等の生命の 終 がハリストティアニンに適い、疾 なく、耻なく、平安なること、及びハ
^{おそ べ しんばん おい よろ こたえ たま もと} リストスの畏る可き審判に於て宜しき 對 をなすを賜わんことを求む、



司祭) ^{しせいしけつ いた さんび われら こうえい ぢよさい しょうしんぢよ えいていどうぢよ} 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光 榮の女 宰、生 神 女、永 貞 童 女マリヤと、

^{しよせいじん きおく われらおのれ みおよ たがい おのおの み もつ ならび ことごと われら} 諸 聖 人 を 記 憶 して、我 等 己 の 身 及 び 互 に 各 の 身 を 以 て、並 に 悉 くの 我 等 の
^{いのち もつ かみ いたく} 生命を以て、ハリストス 神に委託せん、



司祭) ^{けだしなんぢ ぜん ひと あい かみ われら こうえい なんぢちち こ せいしん けん いま} 蓋 爾 は善にして人を愛する神なり、我等光 榮を 爾 父と子と聖 神に獻ず、今も

^{いつ よよ} 何時も世に、



司祭) ^{しゅうじん へいあん} 衆人に平安



司祭) ^{われら こうべ しゅ かが} 我等の首を主に屈めん



司祭) (黙經 ^{しゅわ かみ てん かが じんるい すく ため くだ もの なんぢ しよぼく なんぢ} 主我が神、天を屈めて人類を救うが爲に降りし者よ、爾の諸僕と爾の

^{しぎょう かえり たま けだしなんぢ しよぼく なんぢおそ ひと あい しんぱん} 嗣業とを顧み給え、蓋爾の諸僕は、爾畏るべくして人を愛する審判

^{しゃ こうべ かが おのれ くび ふ ひと たすけ ま すなわちなんぢ あわれみ ま} 者に首を屈め、己の頸を伏し、人の助を俟たず、乃爾の憐を俟ち、

^{なんぢ すくい あお もと かれら つね まも かれら こ ゆうべ つぎ いた よる} 爾の救を仰ぐ、求む彼等を恒に護り、彼等を此の夕にも、次て至る夜に

^{およそ てきおよそ あくま かんぼう むな しりよ あ いねん まも たま} も、凡の敵凡の悪魔の姦謀と虚しき思慮と悪しき意念とより護り給え、)

^{ねが なんぢちち こ せいしん くに けんべい さんようさんえい いま いつ よよ} 願わくは爾父と子と聖神の國の權柄は讚揚讚榮せられん、今も何時も世世に、



【 挿句讚頌 第8調 】

誦經) ^{てん くだ じゅうじか のぼ し いのち し ため きた まこと ひかり} 天より降りしイイススは十字架に上り、死せざる生命は死の爲に來り、眞の光は

^{くらやみ もの あらわ しゅうじん ふくかつ おちい もの のぞ われら ひかりおよ きゅうせい} 黑暗にある者に顯れ、衆人の復活は陥りし者に臨めり。我等の光及び救世

^{しゅ こうえい なんぢ き} 主よ、光榮は爾に歸す。

句) ^{しゅ おう かれ いげん き} 主は王たり、彼は威嚴を衣たり。

讃頌 われら し ふくかつ さんえい けだしかれ う たましい からだ くるしみ
我等は死より復活せしハリストスを讃榮す、蓋彼の受けたる靈と體とは苦の

とき あいわか そのしじょう たましい ぢごく くだ これ とりこ わ たましい きゆうしゅ
時に相分れたり、其至淨なる靈は地獄に降りて、之を擄にし、我が靈の救主

せい からだ はか あ きゆうかい み
の聖なる體は墓に在りて朽壞を見ざりき。

句 ゆえ せかい けんご うご
故に世界は堅固にして動かざらん。

讃頌 われらせいえい しふ もつ なんぢ し ふくかつ さんえい なんぢ これ もつ
ハリストスよ、我等聖詠と詩賦とを以て爾の死よりの復活を讃榮す。爾は此を以

われら ぢごく くるしめ と かみ えいえん いのち おおい あわれみ たま
て我等を地獄の苛虐より解きて、神として永遠の生命と大なる隣とを賜えり。

句 しゅ せいとく なんぢ いえ ぞく えいえん いた
主よ、聖徳は爾の家に屬して永遠に至らん。

讃頌 ああばんゆう はか がた しゅさい てんち ぞうぶつしゅ なんぢ じゅうじか くるしみ しの われ
嗚呼萬有の測り難き主宰、天地の造物主よ、爾は十字架の苦を忍びて、我に

くるしみ なが ほうむり う こうえい うち ふくかつ ぜんのう て もつ とも
苦なきを流せり、瘡を受け、光榮の中に復活して、全能の手を以てアダムを偕に

ふくかつ たま こうえい なんぢ みつかめ ふくかつ き なんぢ これ もつ われら えいえん
復活せしめ給えり。光榮は爾の三日目の復活に歸す、爾は此を以て我等に永遠の

いのち しょざい きよめ たま ひとりじれん しゅ
生命と諸罪の潔淨とを賜えり、獨慈憐の主なればなり。

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世に、アミン。

生神女讃詞 よめ どうていぢょ い がた み かみ ほん もの しじょう かみ はは なんぢ
聘女ならぬ童貞女、言い難く身にて神を孕みし者、至上なる神の母よ、爾の

しょぼく きとう う たま しゅう しょざい きよめ あた じゅんけつ もの いまわれら きがん
諸僕の祈禱を受け給え。衆に諸罪の潔淨を予うる純潔なる者よ、今我等の冀願を

い われらみなすく いの たま
納れて、我等皆救われんことを祈り給え。

奉神者シメオンの祝文 しゅさい いまなんぢ ことば したが なんぢ ぼく ゆる あんぜん ゆ
主宰よ、今爾の言に循いて、爾の僕を釈し、安然として逝か

けだしわ め なんぢ すくい み なんぢ ばんみん まえ そな もの こ いほうじん たら
しむ。蓋我が目は爾の救を見たり。爾が萬民の前に備えし者なり、是れ異邦人を照

ひかり およ なんぢ たみ さかえ
すの光、及び爾の民イズライリの榮なり。

聖三祝文 せい かみ せい ゆうき せい じょうせい もの われら あわれ
聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。

せい かみ せい ゆうき せい じょうせい もの われら あわれ
聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。

せい かみ せい ゆうき せい じょうせい もの われら あわれ
聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世に、アミン。

しせいさんしゃ われら あわれ しゅ われら つみ いきぎよ しゅさい われら あやまち
至聖三者よ、我等を憐め。主よ、我等の罪を潔くせよ。主宰よ、我等の愆を

ゆる せい もの のぞ われら やまい いや たま ことごと なんぢ な よ
赦せ。聖なる者よ、臨みて我等の病を癒し給え。悉く爾の名に因る。

しゅ あわれ しゅ あわれ しゅ あわれ
主、憐めよ。主、憐めよ。主、憐めよ。

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世に。アミン。

てん いま われら ちち ねがわく なんぢ な せい なんぢ くに きた なんぢ むね てん
天に在す我等の父よ、願は爾の名は聖とせられ、爾の国は來り、爾の旨は天

おこな ごと ち おこな わ にちよう かに こんにとわれら あた たま われら
に行わるるが如く、地にも行われん。我が日用の糧を今日我等に與え給え。我等に

おいめ もの われらゆる ごと われら おいめ ゆる たま われら いぎない みちび なおわれ
債ある者を我等免すが如く、我等の債を免し給え。我等を誘に導かず、猶我

ら きょうあく すく たま
等を凶惡より救い給え。

司祭) けだしくに けんとう こうえい なんぢちち こ せいしん き いま いつ よよ
蓋國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世に。



【 主日の發放讃詞 第8調 】

めぐみふかきしゅよ、なんぢはたかきより
恵深主爾高
くだり、みっかのほうむりをうけて、
降三日葬受
われらをくるしみよりときたまえり、
我等苦釋給えり
わがいのちとふくかつなるしゅよ、こう
我生命復活主光
えいはなんぢにきす。
榮爾歸す。

【 生神女讃詞 第8調 】

こうえいはちちとことせいしんにきす。い今
光榮父子と聖神に歸す。



まもいつもよよに、アミン。
何時世世

われらのためにどうていぢよよりうまれ、
我等爲童貞女生

じゅうじかにくぎうたるるをしのび、かみ
十字架釘 忍 神

なるによりてしにてしをほろぼし、ふく
因 死 死 滅 ぼ し 復

かつをあらわししじんじなるしゅよ、なんぢの
活 顯 仁 慈 主 爾

てにてつくりしものをすつるなかれ。
手 造 者 棄 母

じれんのしゅよ、なんぢがひとをあいするあいをあ顯
慈 憐 主 爾 人 愛 愛 顯

らわして、われらのためにきとうするところ
我 等 爲 祈 禱 所

ろのなんぢをうみししょうしんぢよをうけたま
爾 生 生 神 女 受 給

え、わがきゅうしゅよ、のぞみをうしない
吾 救 主 望 失

しひとびとをすくいたまえ。
人 人 救 給

司祭) ^{かみわれら たのみ}ハリストス神我等の ^{こうえい なんぢ き}特よ、光榮は爾に歸す、^{こうえい なんぢ き}光榮は爾に歸す、

こう え い は ち ち と こ と せ い し ん に き す 、 い ま も
光 榮 父 子 聖 神 歸 今

い つ も よ よ に 、 ア ミ ン 。 し ゅ あ わ れ め 、 し ゅ
何 時 世 世 主 憐 主

あ わ れ め 、 し ゅ あ わ れ め よ 、 ふ く を く だ
憐 主 憐 福 降

せ 。

司祭) ^{し ふくかつ}死より復活せし^{われら まこと}ハリストス我等の^{かみ}眞の神は、^{そのしじょう}其至^{はは こうえい}淨なる母、^{さんび}光榮にして^{せい}讚美たる聖

^{しと こくしょうほうしん}使徒、^{わがしよしんぶ}克肖^{およ}捧神なる我^{しよせいじん}諸神父、^{きとう}(某)及び^{より}諸聖人の^{われら}祈禱に^{あわれ}因て我等を^{すく}憐み救

^{かれ ぜん}わん、^{ひと}彼は^{あい}善にして^{しゆ}人を愛する主なればなり、

ア ミ ン 。

【 萬壽詞 】

か み よ 、 わ が く に の て ん の お う 、 お よ び
神 我 國 天 皇 及

く に を つ か さ ど る も の 、 わ れ ら の ふ し ゅ
國 司 者 我 等 府 主

き ょ う セ ラ フ ィ ム 、 お よ び こ と ご と く の せ い き ょ う
教 及 悉 正 教

の ハ リ ス テ ィ ア ニ ン ら を 、 い く と せ に も ま も り
等 幾 歳 護

た ま え 。
給

The image shows a musical staff with a treble clef and a key signature of one flat (B-flat). The melody consists of three notes: a quarter note on G4, a quarter note on A4, and a quarter note on B4. The lyrics 'た ま え 。' are written below the notes, and '給' is written below the first note.